



母の涙…戦争と母・私

富田 英子

農家の嫁として

私の母は、隣村から農家に嫁ぎ、私たち8人（男6人、女2人）を生み育てました。私は長女として3人目に生まれました。当時は家族農業で、子どもは家業の大きな労働力で小学生の頃から一人前に親を手伝いました。春は、畑の土の手入れ・種まき、夏は、大きな背負いかごを背負って雑草取り・桑つみ（養蚕を年4回していました）、秋は、稲刈り・脱穀・天日干し、供出用の俵作りなど、冬は麦踏み等、一年中母の後について、母の真似をしながら農作業を手助けして育ちました。私は、幼い時から体を動かすことが好きで楽しみながら（？）の母との毎日でした。

「銃後の生活」は塗炭の苦しみ

時は、1940年代前半、第二次世界大戦、太平洋戦争と戦争がエスカレートして、ついに日本も国家総動員で戦火にまみれる日々となりました。連合軍の日本本土への上陸が（沖縄には上陸）目前となりました。銃後の生活は、母にとっては塗炭の苦しみの毎日となりました。祖母（愛国婦人会長

で留守が多い）と11人の子ども（前橋大空襲で焼け出され、父親が戦死し、路頭に迷った3人の従姉妹弟を引き取っていました）を子育てしながら農業の仕事を一身に背負うことになっていました。

そんな日々、夕方になると母は、柱に寄りかかりボーとして動かないことが目に付くようになりました。私は、「母さん、いろいろとっても大変だよ。この戦争で。でも、なんでこんな戦争になるまで反対しなかったん？」と母をなじりました。

母は「反対することはできなかったよ。気が付いたらもう戦争になっていたんだよ」と言いながら止めどもなく涙を流しました。

私の原点…母の涙と言葉

私の戦争絶対反対と平和への願いは、この時の母の涙と言葉が原点となっています。戦争というのは、始まるまでにその危険が予測される事態が積み重ねられる。それ等を一つ一つその都度潰していかないとまた同じ戦争が繰り返されるのだと。

また、母の言葉と涙は、ジェンダー平等の問題と平和の問題が大きく繋がっているとの思いを新たにしてくれます。

